

白居易の道家道教思想

蜂屋 邦夫

はじめに

白居易（七七―八四六）が儒仏道三教に通じ、そのどれにも並々ならぬ関心を寄せたことは、よく知られている。その関心の寄せかたについては、さまざまな研究があり、いろいろな角度から分析されている。⁽¹⁾ 本稿も、居易の三教思想について論述するものであるが、とくに道家道教思想方面に重点を置いて検討したい。⁽²⁾

白居易は、自己の文集を分類して編輯した際、詩を諷諭、閑適、感傷、律詩に分けた。律詩は形式上の呼称で

あるから、この分類は整合性に問題があり、律詩中かなりのものが内容的には閑適に相当する。⁽³⁾ 閑適の基調は老莊的隠逸志向と考えられるから、居易において道家思想はかなり重い意味をもっていた、と言えそうである。そこで、それらの詩を中心に、年代を分け、また道家思想に関係する他の資料をも参照しながら、考察を進めたい。

一、進士に合格してから京兆府戸曹参軍をやめるまで

この時代は白居易のおよそ三〇歳代に相当する。翰林

学士や左拾遺として登用され、新興官僚の一員として政治の場で大いに発言した。したがって、詩文ともに、いわば儒家的な表現が顕著である。しかし同時に、当時の風潮をうけ、道家思想にも親しんでいる。

白居易は八〇〇年に二九歳で進士に合格したが、その試験問題「性習相遠近」の回答である賦（卷三八）からして老子と孔子を並列して述べたものであった。この賦によって居易の思想を伺うには問題があるが、ただ、『論語』陽貨の「子曰、性相近也、習相遠也（孔注：君子慎所習也）」は、それに続く「子曰、唯上知与下愚不移（孔注：上知不可使為惡、下愚不可使強賢）」やこれらの孔注とともに考えれば、「人間性は本来同じようなもののなのに、習慣・学習によって違いが出る」の意味に読まれていたであろう。ところが居易は「性相近」について「有教無類」（同・衛霊公）と結びつけ、孔子も「非生知之」（同・述而）と言ったのであるから、孔子が聖人となったのは「志学」（同・為政）してかならず「切問而近思」（同・子張）したからであり、そこで孔子の方法に即すれば「志はいよいよ篤くなり、性はいよいよ近くなるであろう（志弥

篤兮、性弥近矣）」と言う。つまり、教育によって「性が近くなる」ことを述べているのであり、その到達点は「至性大同」にあった。こうした論旨がたんに修辭上の作為ではなく、居易の思想にもとづくものだと思えば、そこに、性さえも変化させ得るとする新興知識人の意識の反映がみられると言えるであろう。

では、老子についてはどうか。居易によれば老子は徳の最高の者であるが、その老子さえも道に従った、つまり修身した、のであり、徳とは素朴にして修身することである。その老子の方法に即すれば「習はいよいよ精となり、道はいよいよ遠となる（習愈精兮、道愈遠爾）」と言う。「遠」は「道」の深遠さであって、「習」とは結合されていない点が注目される。福と禍は慎と不慎に由り、慎とは道に従い善に遷ることだ、と言うのであるから、結局、「性」と「習」には大差はない。じつは「至性大同」は「習」の到達点ともされているのである。要するにこの賦において、老子は孔子とまったく同じ重さを占めているのである。

同年に書かれた「求玄珠賦」は全面的に『莊子』天地

篇の説明である。八〇二年までに書かれたという「動靜交相養賦」は、『莊子』と『易』を引用し、老子と顔回に言及して、動靜に時宜があることを述べた抽象的な内容のものであるが、躁を民、静を君、躁は静にもとづくとする点、有は無から生まれ、無は母、有は子とする点、などに魏晉以来の老莊学の影響がみられるであろう。

かくて、居易のごく初期の文章から、老莊道家の思想は、かなり色濃く表現されているのである。むしろ、これは表現上のものであつて、どの程度に居易の思想の骨肉となつていたかは、またべつの事柄である。

八〇六年、三五歳の時、居易は制舉に應ずるため、校書郎をやめ、親友元稹とともに長安の華陽觀に数カ月ひきこもつて論文を執筆した。それが「策林」七五篇（卷六二―六五）である。これは、その性質上、むしろ大部分儒家の立場の言辭であるが、七「不勞而理」は王者が「百姓の心をもつて心とする」（『老子』四九章）ことを讃え、一一「黃老術」も王者が無為で民がおのずから化する老子の道（同・五七章）を推奨している。また、五四「刑、礼、道」では三者の循環を説き、道の時代を最高としな

がらも現状は刑から礼に移すべき時代であると論じている。

いずれも平明ではあるが、とくにすぐれた分析とは言えない。のみならず、七と一は矛盾しないとしても、もしその線で王者が政治をした場合、五四の論旨とどう調停すべきか困惑するであろう。この齟齬は、項目ごとにそれにふさわしい議論をしたことに原因があると思われる。居易の詩文を通読すると、個々の作品にはそれなりの世界を看取できるが、全体としてはしばしば矛盾を感じる人が多い。右の「策林」の問題はほんの一例であるが、あるいは、居易の詩文の性質をすでに暗示していると言えるかもしれない。

六七「議釈教」は仏教を政治の場から追放することを主張している。その根拠は、仏教の特色である禪定、慈忍、報応、齋戒の四点は中国の先王の道にすでに完備していること、仏教の精神が王化の精神と同じであるとしても王者の教令が複数化することは有害であること、仏教には中国の風習と違った点があること、僧徒や仏寺が増加し生産人口を減少させていること、などとされている。

る。「晋宋齊梁以来、天下の凋弊するは、未だ必ず此に

由らずんばあらず」と結論しているのであるから、この場合、どう考えても居易は反仏の立場にあるとしか認められない。王者の政治の問題としてのみ論じたのだ、と考えるには追放の根拠が広すぎる。また、仏教に禪定以下の美点を認めているのであるから、「策林」は公式のたてまえ論であり、個人的な傾倒もしくは信仰とは別であるという解釈も成りたつたが、だとすれば居易ははなはだ表裏のあった人物だということになる。居易は、ともかく二〇歳代末には仏教に親しんでいるのである（『八漸偈并序』卷三九）。居易と仏教との関連について、この辺の問題はもっと検討されてよい。

白居易が左拾遺であつた三七、八歳ごろは、社会批判精神がもっとも旺盛であつた時期として位置づけられている。その時期の代表作に新樂府があり、その一つ「海漫漫」（卷三）は、神仙説を題材にしている。秦始皇、漢武帝の神仙信仰にからめ、不死の薬や羽化昇天を批判しているが、その根拠の一つとして『老子』には薬や仙人、白日昇天のことは出ていない、ということ述べて

いる。

また、八一〇年、江陵士曹掾に貶謫された元稹の詩に応じた「和答詩十首」（卷二二）のうち、「和思帰楽」は、意気消沈する元稹を励まし、「人生は、高々百年の間をこの世界に身を寄せているだけであるから、逍遙の篇、頭陀の經に身心を託し、死生を達観し寵辱を度外視した老子の心境たれ」という意味の句がみえる。情況に流されない自立の精神を論じたものであるが、この主題は以後の居易の作品にくり返しあらわれる。

この時期に、ほかにも神仙説批判や、精神的支柱として老莊や仏教の思想を詠んだ詩が見あたる。このことは、居易の精神を理解するうえでやはり看過できないことがらであろう。

二、母の喪に服した時から江州司馬時代まで

白居易は、八一一年四月、母の喪のために官をやめ、^{下邳}（陝西省渭南東北）にひきこもつた。服あけて八一四年に太子左賛善大夫に任じられたが、職責を越えて上疏

したために八一五年に江州司馬に貶謫された。のち、八一八年一二月に忠州刺史に任じられるまでの八年弱の間は、ときに政治への情熱を示すこともあるが、隠遁や失意の生活を反映して老荘的閑適の境地を詠んだ詩が目だつ。

服喪中に詠んだ「養拙」(巻五)には、

鉄柔不為剣 鉄やわければ 剣にはならず
木曲不為轅 木の曲れるは 轅にならぬ
今我亦如此 愚かな我れも またその類
愚蒙不及門 仕官の道は とんとごぶさた
甘心謝名利 名譽や利益 もとより要らぬ
滅跡帰丘園 ひとりのんびり 田園ぐらし
坐臥茅茨中 茅ぶき小屋に 起き臥し気まま
但对琴与樽 琴をつまびき また酒を飲む
身去羶鎖累 身の束縛は みな解きはなち
耳辞朝市諠 まちの喧噪 耳には入らぬ
迢遙無所為 氣持ゆったり なすこともなく
時窺五千言 時に老子の 書物ひもとく

無憂樂性場 くよくよせずに 楽しむ氣持
寡欲清心源 何の欲なく 心はきれい
始知不才者 愚鈍なりやこそ 根本の道
可以探道根 探れるものと 悟ったことよ

とあり、酒と音楽をなぐさめとする無憂寡欲の老子的心境が示されている。同時期の「贈王山人」(巻五)は、

聞君減寢食 君のうわさは 寢食へらし
日聽神仙說 神仙説に うつつを抜かす
暗待非常人 世の常ならぬ 人を期待し
潛求長生訣 長生の術 教わりたしと
言長本対短 長生といい 短命という
未離生死轍 いつか必ず 死ぬべきものぞ
仮使得長生 たとえ長生 できたとしても
才能勝夭折 夭折よりは ややましなだけ
松樹千年朽 松の樹齡は 千年もあり
槿花一日歇 槿の花は いのち一日
畢竟共虚空 終つてみれば いずれも空虚

何須誇歲月 なんて長生 ほこれるものか
彭生徒自異 われは違うと 彭生いうが
生死終無別 生死すること 世間とおなじ
不如学無生 学びなさいな 無生の教え
無生即無滅 生がなければ 死ぬこともなし
と、長生術に執心する王山人に、むしろ生死を超越する
仏教を学べと教えている。ただ、「無生」なら「無滅」
だというのは理屈であって、こうした表現から居易の仏
教信仰の深淺を量ることはむずかしい。

また、「対酒」(巻〇)は、

人生一百歳 人のいのちは 一百歳よ
通計三万日 通して計れば 三万日よ
何況百歳人 いわんや百まで 生きぬく人は
人間百無一 百にひとりも ありはせぬ
賢愚共零落 賢者も愚者も いずれは死ぬし
貴賤同埋没 身分の上下も 関係ないよ
東岱前後魂 東の岱山 亡霊ばかり

北邙新旧骨 北の邙山 墓ばかり
復聞藥誤者 仙藥飲んで 身を誤るは
為愛延年術 延年の術を 求むればこそ
又有憂死者 憂いをいだいて 身まかるものは
為貪政事筆 政治のことに かまけすぎ
藥誤不得老 藥違えば 長生できぬ
憂死非因疾 憂いて死ぬのは 病ではなし
誰人言最靈 もつとも靈なは 人だというが
知得不知失 欲ばればこそ 損しらす
何如会親友 親しき友と 盃かわし
飲此盃中物 酒のむことこそ 愉快のきわみ
能沃煩慮銷 憂いやわすらい さっぱり消えて
能陶真性出 真の氣持 生まれでる
所以劉阮輩 されば劉伶 阮籍さんは
終年醉兀兀 年がら年中 酔っていたとか

と、延年術よりも酒を推奨している。酒は居易の生涯を通じて即物的に彼の精神を解放したものだと言えるが、劉伶・阮籍の豪放にして切実な飲酒の趣は感じられな

い。また、この詩は「事物 外より牽き、情理 内に動き、感遇に随いて歎詠に形る」感傷詩（与元九書 卷四五）に分類されているが、詩の気分は閑適詩と変わらない。

長篇の律詩「渭村退居、寄礼部崔侍郎、翰林钱舍人诗一百韻」（卷一五）も服喪中の作品である。その結末は、老莊の外身・齊物の見地に立ち、天命に従って穏かな氣持で暮らすこと、禪定や坐忘によって心を落ちつけること、癡さを断ち苦しみから済まれること、等をのべ、「不動はわが志たり、無何はわが郷なり。憐むべし身と世、これより兩つながら相い忘れん」としめくくる。仏教風の表現もあるが、全体として老莊的隱遁世界が肯定されている。しかし、これに先立つ長大で華麗な長安生活の叙述と対比すれば、この結末は、当塗から隔たつて不安定に揺れる心情を沈静させ慰藉するものであつたと思われる。

ところが、居易自身の意識では、このころから老莊よりも仏教に接近していたつもりらしい。服あけ後の、左賛善大夫時代の作品「贈杓直」（卷六）は、親友の李建に贈つた詩であるが、若いころは「逍遙遊」に傾倒した

が最近南宗禪に心がむいている、と述べている。だが、それに続いて「外は世間の法に順い、内は区中の縁を脱す。進んでは朝市を厭わず、退いては人寰を恋わず。……形を老小の外に委ね、懷を生死の間に忘る」とあるのは、仏教語を交えながら、措辞といい心情といい、とくに出処同帰を根拠として朝隱をよしとした魏普以降の老莊的境地のようである。省略した部分には「興あればあるいは酒を飲み、事なければ多く閑を掩う。寂靜 夜深くして坐し、安穩 日高くして眠る」などあり、これは、やや穏かながら、放逸自得した六朝貴族の精神に通じるものである。すなわち、こうした詩的表現に関するかぎり、居易の仏教への潜心は老莊的自得とほとんど區別がない。

江州司馬に貶謫されたときも、その心の支えは、「読莊子」（卷一五）に、

去国辞家謫異方 朝廷追われ 地方に來ても
中心自怪少憂傷 さてもふしぎや 憂いなし
為尋莊子知帰処 莊子を読んで 落ちつきを得て

認得無何是本郷 無何こそ郷里と 知つたため

とあるように、まず老莊思想に求められたのであつた。以後も、こうした境涯の詩は多いが、「宿簡寂觀」（卷七）には、

巖白雲尚屯 白き雲 岩をめぐり
林紅葉初隕 林燃え 紅葉散りそむ
秋光引閑歩 秋の日に そぞろ歩めば
不知身遠近 われ知らず いずこに來しか
夕投靈洞宿 夕されば 道家の宿り
臥覺塵機混 俗ごころ 寢れば消ゆる
名利心既忘 名も富も 何せむものぞ
市朝夢亦尽 有為の夢 また尽きはてぬ
暫來尚如此 かりそめの 宿りすら良し
況乃終身隱 身を終えば いかばかりなむ
何以療夜飢 飢えくれば なにを食さむ
一匙雲母粉 ひとさじの 雲母の粉よ

とあり、雲母粉を飲む習慣があつたことも知られる。いったい、居易は多病の身であり、病氣や薬を詠んだ詩も多い。ここにいう雲母粉は咳や動悸、目眩、惡寒などの薬で、居易はいわば総合保健薬として飲んだのであろうが、『神農本草經』には「明目」ともあるから、宿痾の眼疾のためでもあつたかもしれない。

「早春」（卷七）は、

雪銷冰又積 雪は消えたし 氷もとけた
景和風復暄 風暖かく 春景色
滴庭田地湿 庭の畑の 手入れをするか
薺葉生牆根 牆の根っこにや 薺の葉
官舍悄無事 官舎ぐらしは ひっそり無事で
日西斜掩門 日がかたむけば とじこもる
不開莊老卷 老子莊子を 読まずにいれば
欲与何人言 誰と話そと 樂しめない

とあり、江州生活の「こまが何える。おなじく「詠意」（卷七）は、かねて莊子の道を慕っていたが、最近や

それに近い境地になり、山水に遊んで「富貴もまた苦あり、苦は心の危憂にあり。貧賤もまた楽あり、楽は身の自由にあり」だ、と詠んでいる。

とりわけ秀峰廬山は居易の心を慰め、また廬山と深くかわる慧遠や陶潜などの事蹟も居易の気持を高揚させたようである。八一七年には、完成した廬山山麓の草堂のために「草堂記」(巻四三)を書き、自適の心境を吐露しているが、儒、道、仏の書二、三巻を草堂中に備えたと言っている。これは、一事にのめりこまない平衡感覚をあらわしているが、同時に、それゆえに全体としてはやや浅薄な印象を与える居易の思想世界を象徴している、とも言えそうである。

草堂にはまた、蟠木(曲木)の机があった。居易は「蟠木謡」(巻三九)を作って、不材で人の役に立たないという点で自分と共通する蟠木に寄せる愛着をのべた。ただ、本来に不材なら机にもならないわけであるから、居易の理屈にはいい加減なところがある。しかし、天子諸侯の建物や車輛の材料にならないことも確かであるから、居易は、それを不材として、そこに自分の姿を投影したの

であろう。

「齊物二首」(巻七)は、草堂生活の消閑であろう。長短に分があり、窮通ともに無悶、とする第一首はともかく、四季に緑をたもつ竹は、椿寿八千歳には劣るが、槿花(ひばな)の一日の命よりましだ、という第二首は、先学も指摘するように、たしかに「齊物論」の主旨に外れる。だが、居易が齊物思想を誤解していたわけではなく、この詩は、それに対していささかの揶揄をこめて日常世界の実感述べたにすぎない。ただ、こうした詩を作ったこと自体に、居易の、およそ思想というものに対する軽々しい態度、もしくは齊物思想についての理解の浅薄さがある、と読みとることも可能ではある。

江州司馬になる前は、居易は不死の仙薬や神仙説に批判的であったが、この時期、こうした世界にいささか接近したようである。「尋郭道士不遇」(巻一七)は、江州を去る直前のものであるが、『参同契』中の事を質問しようとして来たのに道士が留守では、いつ心の落ちつく日が得られようか、と歎いている。道士の住居には薬爐に火が燃えていて丹が作成中であり、水車が廻って碓が

雲母を搗いている。つまり、この『参同契』は煉丹術の教科書であって、いわゆる内丹を説くものではない。居易は外丹に関心をもったのである。

ところが、同じころ「対酒」(巻一七)には、『易』で占卜することや『参同契』に心を勞することを斥け、むしろ酒を飲んだほうがよい、とあり、もう一首の「対酒」(巻一七)にも『参同契』によって丹薬を作るのはむずかしいから、しばらく酒にかえよう、とある。とすれば、居易がどの程度本気で煉丹に関心をもったのか、これだけでは不明であるが、着手したことは確かである。左拾遺時代の仙薬批判は天子を諫める官僚としての公の立場のもの、廬山での仙薬作成は個人的関心からのものと、いちおうのつじつまは合うが、仏教批判と仏教信仰の場合とおなじく、思想上の一貫性のなさは、やはり弁明不可能であろう。

三、忠州刺史時代から刑部侍郎時代まで

この時期は、江州司馬の任期が満ちて忠州(四川省忠県)刺史に昇任し、その後、長安や洛陽でいくつかの役職に

ついたり、杭州や蘇州の刺史となって地方生活を送った八一九年からの一〇年間、ほぼ白居易四八歳から五七歳の時期である。

忠州に赴任の途中で詠んだ「江州赴忠州、至江陵已来、舟中示舍弟五十韻」(巻一七)には「剣の学将に何ぞ用いん、丹を焼くも竟に成らず」とあり、江州生活での煉丹した経験述べている。この詩は、朝隠して世俗に韜晦する止足の境地を求めたものである。

江州での煉丹については、八二五年の作とされる「同微之贈別郭虚舟煉師五十韻」(巻二二)にも、虚舟師から『参同契』を授かり、勉強したこと、煉丹したが失敗したことが見え、前章で触れた「尋郭道士不遇」を補足している。元稹が煉丹したことは「思旧」(巻二九)にも見える。しかし、そこでは、居易は自分は服食していないと述べているから、要するに煉丹も没頭するほどではなかったらしい。そのあたりは、いかにも居易らしい。

「不二門」(巻二二)は、忠州での一心境を詠んでいる。病弱であるうえに老年も迫り、朝廷からは疎外され、「大薬」を焼いても失敗し、「医王」に救いを求めようと

思うが、「唯だ不二の門あり、その間に天寿なし」と、結んでいる。この詩は「感傷」に分類されており、閑適の余裕さえない状況では、観念的に行きつく先は仏教しかなかったことを示している。ただ、こうした詠意に道家道教的世界からの思想の変化は認められるにしても、それはべつに思想の深化と呼べるものではなく、自己の状況に応じてふさわしい衣裳を着たようなものである。おなじく感傷詩の「逍遙詠」（巻二一）は、長安に戻ってからのもので、この身は「万劫の煩惱の根」だから好まず、「一たび虚空の塵の聚まる」ものだから厭いもしない、無恋無厭が「逍遙人」なのだと言い、仏道折中の趣がある。あるいはこの辺に、わが心身につかず離れずに詩を詠む居易の、いわば透明な心情を解く鍵がひそんでいるかもしれない。

杭州刺史時代も相変らず病気がちであり、「新秋病起」（巻二〇）は、

一葉落梧桐 桐の葉の 落ちるこのごろ
年光半又空 半年は 空しく過ぎぬ

うには見えない。

杭州の任期を終えた後、居易は洛陽に住んだ。「味道」（巻二三）はそのころの作であり、

叩齒晨興秋院靜 齒を鳴らし 起されば静か 秋の庭
焚香宴坐晚窓深 日暮れて香を ゆつたりと焚く
七篇真誥論仙事 七篇の 真誥に見る 仙のこと
一卷壇經說仙心 壇經は説く 仏のこころ
此日尽知前境妄 これまでは すべてが妄と悟りたり
多生曾被外塵侵 輪廻の間に 外塵をうく
自嫌習性猶殘處 いとわしや 習い残れる わが心
愛詠閑詩好聽琴 詩を詠むことと 琴を聴くこと

と仙仏を並べているのは、夏の経験があるからであろうか。起きてまず叩齒する習慣があったことがわかるが、全体の雰囲気は仏教的である。

蘇州刺史時代、「留別微之」（巻二四）では老子の知足をのべ、「感悟妄緣、題如上人壁」（巻二五）では、

秋多上階日 高どのに しげく登れば
涼足入懷風 心地よし 風の涼しさ
病瘦形如鶴 病みあがり 瘦せさらばえて
愁焦鬢似蓬 髪みだれ 愁はふかし
損心詩思裏 詩を詠めば 心いたみて
伐性酒狂中 酒飲めば ものぐるおしや
華蓋何曾惜 榮達は なんの未練ぞ
金丹不致功 金丹も ついに成らざり
猶須自慚愧 かえりみて やれ恥ずかしや
得作白頭翁 白髪の 翁となるを

と、その心境を詠む。この詩は救いのない感じであるが、翌年の作とされる「仲夏齋戒月」（巻八）では、三句の間、なまぐさものを断つたところ、身体の調子がすこぶるよく、そこで「始めて絶粒の人の、四体さらに軽便なるを知り」、そうした人物は病氣も克服できるし、神仙にもなれるだろう、と述べている。これまで列禦寇や赤松子の伝説を疑っていたが、いまはじめて首肯できた、とも言っているが、この後の居易の生活がとくに変わったよ

自從為駭童 いとけなきより
直至作衰翁 年よる今も
所好隨年異 好みかわれど
為忙終日同 げに忙しや
弄沙成仏塔 塔を建てたり
鏘玉謁王宮 王宮もうで
彼此皆兒戲 いずれも児戯ぞ
須臾即色空 すぐ空となる
有當非了義 あくせくは妄
無著是真宗 著なきは真
兼恐勤修道 道の修業も
猶應在妄中 はげめば妄か

と、仏教の空をのべる。修道に励むことには、たしかに知足や詠詩の気分とは微妙に違い違ふところがある。それを「有當」とし「妄」とするところに、専門の仏僧と一線を画する居易の立場がうかがえて興味ぶかいが、「妄」の内容をどこまでつきつめたかは不明である。

長安に戻って秘書監となった八二七年には、文宗の誕

生日（二〇月）に麟徳殿で三教談論が行なわれ、居易は儒家を代表して談論を司会している。その記録が三教の「殊途而同帰」を述べた有名な「三教論衡」（卷六八）であるが、これは公式の儀礼的な発言であって、居易の思想をそのまま表明したものとするのは、やはり問題であろう。

長安生活も最後のころ、元稹に和した二三首の詩のうち「和知非」（卷三二）は、心の拠り所として第一に禪、第二に酔をあげ、禪は人我をなくし（過剰な自意識がなくなる、ということであろう）、酔は榮悴を忘れさせる、と言っている。これに対して儒教は礼法を重んじ、道家は神気を養うが、礼は煩瑣なものであるし、養神には避忌が多いから、禪と酒が一番で、「両途は同じく致を一にす」るものだ、と言うのである。「養神氣」のうちには煉丹も入るのであろう。煩瑣と制約を避けて単純に即く、というのとは一種の達観であり、そこにはそれなりの人生の知恵があるのかもしれないが、酔境は居易の若年のころからの桃源境であるから、自分の性格に合ったものを明言しただけ、とも考えられる。

四、洛陽に移り太子賓客分司となつてから死ぬまで

白居易は、八二九年の春、病氣を理由に刑部侍郎を辞し、太子賓客分司の職掌で洛陽に住んだ。この五八歳の時から、八四六年八月に七五歳で死ぬまで、だいたい洛陽で生活している。その間、八三九年一〇月には左足不随の中風にかかり、八四二年、七一歳で太子少傅をやめ、刑部尚書の肩書をもつて致任した。政争の渦中の長安を離れ、洛陽に自適して晩年を過ごしたわけである。老衰と病氣、家族の不幸が重なるなかで、自在に詩を詠み、酒を嗜んで精神の平衡を保ち、最晩年には、表面的にはとくに仏教に傾斜したようである。

八三〇年の作とされる「晨興」（卷三二）は、

宿鳥動前林　ねぐらの鳥は　動き出し
晨光上東屋　朝の光も　さし込んだ
銅爐添早香　銅の香爐に　香焚かれ
紗籠滅殘燭　紗の行灯　火が消えた

頭醒風稍愈　風邪の病も　やや愈えて
眼飽睡初足　睡りたつぷり　眼がさめた
起坐兀無思　起きてぼんやり　坐りこみ
叩齒三十六　三十六回　齒鳴らした
何以解宿齋　朝の食事は　何にする
一杯雲母粥　雲母の粥が　一碗だ

と、叩齒の習慣と雲母粥を食する日常が描かれている。「風」の実態はよく判らないが、むしろ後年の中風のような重いものではない。たんなる頭痛かもしれない。

分司の職には河南尹の時期を挟んで再度就いているが、よほど気に入ったとみえ、二度目の時の八三四年には「詠所樂」（卷二九）に、奉祿は多く職務は少なく、書を開いたり酒を飲んだりでき、「ただ今日のごときを得ば、終身厭う時なけん」と、満足感を詠んでいる。

同じころの「寄盧少卿」（卷二九）は、身心の安寧を説く老荘や、酒食に制限をつけ声色を戒る道書仙方に言及しつつ、徳を守って夭折した顔回とハーレムを妾媵で満たしながら百余歳の寿命を保った漢初の張蒼を引き合い

に出し、仙道書はあてにならないではないか、と盧少卿に疑問を呈している。この詩には居易の現実的な考え方がよく表われており、こうした一種の合理的な現実主義が、居易をして一つの価値観に埋没せしめることから救っていたのであろう。

だからと言って、居易は道家道教思想や道士から遠ざかったわけではない。同時期の「負春」（卷三二）には、

病来道士教調氣　病みてより　道士は教う氣を調えよ
老去山僧勸坐禪　老いされば僧侶は勧む座禪をせよと
辜負春風楊柳曲　春風は　楊柳の枝に　たわむれ絡み
去年斷酒到今年　去年からすでに酒断ちわびしき今年

とある。好きな酒を断つに至った病氣が何であったのかは、わからない。

同時期の心境を示すものを挙げると、「池上閑吟二首」（卷三二）の第二首には、

竹樹池亭十畝余 池あり亭あり 竹林もあり
 非道非僧非俗吏 道士や僧侶や 俗吏じゃないが
 褐裘烏帽閉門居 そまづな衣服に 隠居のくらし
 夢遊信意寧殊蝶 夢みて遊べば 蝶々の気持
 心楽身閑便是魚 のんびりぶらぶら 魚のこころ
 雖未定知生与死 生きるゝ死ぬゝとは わけ判らぬが
 其間勝負両何如 死のうゝ生きよと なに違いある

とあり、荘子的な気分が詠われ、「早服雲母散」(巻三二)には、

曉服雲英漱井華 朝まだき 雲母を服し
 口すすぐ 初汲みの水
 寥然身若在烟霞 静けさや わが身のまわり
 仙人の 世界のごとし
 藥銷日晏三匙飯 藥効の 薄れくるころ
 日はおそく 三さじのご飯
 酒飲みて 喉の渴きに
 茶を飲めば 春の深めり

毎夜坐禪觀水月 夜くれば 坐禪を組みて
 水の月 虚しきを観る
 有時行醉玩風花 つれづれに 酔いにまかせて
 散る花を たわむれ愛でつ
 浄名事理人難解 維摩居士 眞面目は
 世の人の なべて判らず
 身不出家心出家 かりそめに 家にとどまり
 心こそ 出家の境地

と、仙仏一体の境地のようである。維摩居士を気どることとは居易の特色の一つであり、自覺的には居士という在り方がいちばん共感しうるものであったようである。しかし、老莊的境地もまた生涯掘り所とした。ところが「読老子」(巻三二)や「読莊子」(巻三三)には、「言う者は知らず、知る者は言わず」と言うなら、なぜ五千言を著述したのかとか、自分の道は莊子の齊物と違つて同中に不同のあるもので、逍遙の性は同じだと言つても鸞鳳は蛇虫より勝れている、などと老莊をあげつらつてゐる。『老子』の批判は珍しいものではないが、いちお

う理屈はとおる。だが『莊子』への批判は、やはり的はずれである。しかし、この詩も多少の実感を寸描したいわば軽口であつて、重い意味はない。その証拠には、この翌年の作とされる「閑園独賞」(巻三二)には、

午後郊園静 昼さがり 園静かなり
 晴来景物新 晴れきたり 景色あざやか
 雨添山気色 雨降りて 山さえずえと
 風借水精神 風ありて 水辺うるわし
 永日若為度 長き日を いかにか過さん
 独遊何所親 われ独り 誰に親しむ
 仙禽狎君子 鳥どもは 君子の仲間
 芳樹倚佳人 木陰には 佳人憩えり
 蟻闘王争肉 蟻と蟻 えさを争い
 蝸移舍逐身 かたつむり 進むを競う
 蝶双知伉儷 蝶二匹 夫婦のごとく
 蜂分見君臣 蜂あまた 君と臣あり
 蠢蠕形雖小 虫どもは 小さけれども
 逍遙性即均 それぞれに 自足してあり

不知鵬与鴟 大鵬と みそさざいとは
 相去幾微塵 いかほどの 違いのあるや

とあり、論理の破綻はない。

「隠几贈客」(巻三〇)は、

宦情本淡薄 官仕え どうでもよろし
 年貌又老醜 年をとり 姿みにくし
 紫綬与金章 きらめける 高き位は
 於予亦何有 わが心 つとに慕わず
 有時猶隱几 ある時は 脇息により
 答然無所偶 ほんやりと 呆けてすごす
 臥枕一卷書 寝るには 書物が枕
 起嘗一盃酒 起きあがり 酒を一杯
 書将引昏睡 書を讀めば つい睡りこみ
 酒用扶衰朽 酒のめば しばしの元氣
 客到忽已酣 客くれば たちまちに酔い
 脱巾坐搔首 頭巾とり 頭ぼりぼり
 疏頑倚老病 老いて病み なまけて頑固

容恕慚交友 度量なく 友に恥ずかし
忽思莊生言 ふと思う 莊生の言
亦擬鞭其後 欠点を 直してみるか

と、洛陽生活の気ままを活写している。「巾を脱ぎて坐るに首を搔く」とは礼儀に外れたありさまであるが、阮籍らのような趣味はない。「感事」(巻三三)は、

服氣崔常侍 氣を服す 崔常侍
燒丹鄭舍人 丹を焼く 鄭舍人
常期生羽翼 仙人に ならんとし
那忽化灰塵 たちまちに 死出の旅
每遇淒涼事 ことにつけ うら淋し
還思潦倒身 われひとり 年とりぬ
唯知趁盃酒 酒をこそ 嗜めど
不解鍊金銀 鍊金は わかりやせぬ
睡適三戸性 いねむれば 身体よく
備安五藏神 ものぐさは 心地よし
無憂亦無喜 喜ばず 憂えずに

が多いが、「天人陰陽の間にまた恐らくこの理なし」であって、老子も教えたように「身を後にして始めて身存す」というのが「真道」である、と言っている。その居易にして、ひところ煉丹に手を出したのであるから、この詩はその経験を踏まえたものであろうし、また、当時の煉丹術の盛行を推量させるものでもある。

七〇歳の時の作「遇物感興、因示子弟」(巻三六)は、若年から生涯はせいぜい七〇歳と予期していた居易が、その年齢にあたって子弟を教訓したものである。処世には愚にして善なる亀の性、鈍にして無慮の鳩の心もち、立身には強弱剛柔の間に居れ、と諭し、「かみは周孔の訓に違ひ、かたわら老莊の言を鑑よ。ただにその後れたるを鞭つのみならず、またその先んずるを鞭すを要めよ」と、儒道折中の立場に立っている。この詩は、かなり居易の本音を表わしたものであろう。なんと云っても基本は儒教であり、老莊思想は儒教の剛直を気分的に中和させ、身の処し方を円滑にするもの、これに対して仏教はもっぱら内面的な苦しみを癒す精神的な拠り所であった、と思われる。それゆえにこそ、時によって強調点は

六十六年春 六十と 六の春

と、道教に傾倒して世を去った友人に対する憐憫と、いわば死灰の境地に至った自得とを並べて詠み、「無憂無喜」とは言うが、その裏に憂もあり喜もあるようである。

さて、この時期の居易の思想がうかがえる恰好の資料が八三八年六七歳の時の作「醉吟先生伝」(巻七〇)である。言うまでもなく、陶潜の「五柳先生伝」を模倣したものであるが、淵明の伝が簡にして要を得、質素な趣のものであるのに対して、居易の伝は、その詩文にふさわしく饒舌で華美である。しかも気分として淵明を気どる点に、浅薄の印象が残る。内容上の特色は、みずから大中小乗の仏法に通じていると述べる点、自分は中庸を得た人間ではないが利殖や博奕を好むわけでも煉丹に凝るわけでもなく、盃觴諷詠の間に自適するだけだとして、その生活を徹底的に肯定している点、などにある。

この伝においても煉丹術は否定されていたが、翌年の作「戒薬」(巻三六)は、もっぱらその事を詠んでいる。老年になって不死を求めて服食し、却って生命を損う者

違うが、三者は常に無矛盾に共存していたのであり、その間に思想の深化発展があったというわけではあるまい。

おなじころの「池上寓興二絶」(巻三六)は、

濠梁莊惠謾相爭 濠梁や 莊子恵子の 争いぬ
未必人情知物情 知る由もなし さかなの心
鰕捕魚来魚躍出 かろうその 魚とり来れば魚おどる
此非魚樂是魚驚 いかで楽しや 驚きおどる

水浅魚稀白鷺飢 水浅く 少なき魚に 鷺は飢え
劳心瞠目待魚時 ただひたすらに 目を凝らし待つ
外容閑暇中心苦 見るからに 鷺の姿の のどけしや
似是而非誰得知 心のあせり 誰が知るものぞ

と、莊子批判めいたものであるが、この詩に対する評価批判は、すでに述べたこととおなじである。表現上の論理の矛盾はいくらでも衝けるが、居易としては外見と内心の差に感興をもよおしたにすぎない。

つとに詩仙と言われ（『与元九書』巻四五）、琴酒諷詠に自適する居易は、はた目には仙人志向の人間と見えたのであろう。「客有説」、「答客説」（巻三六）では、海上のある神山に居易のための一室が用意されていた、という客の話に対して、居易は、自分は仏教を学んでいるのであって、仙を学んでいるのではない、と答えている。煉丹などによって成仙することは、結局、居易の現実的な精神と合わなかったと言える。しかし、精神を安定させる老莊思想には最後まで親しんでおり、『説道德経』（巻三七）には、

玄元皇帝著遺文 玄元皇帝 書物をのこし
鳥角先生仰後塵 隠者のわたくし その道慕う
金玉滿堂非已物 金銀財宝 わが物ならず
子孫委蛻是他人 孫子も身まかりや ご他人さまよ
世間尽不関吾事 世間の誰もが わがこと知らず
天下無親於我身 もともと世界は ひいきをせぬぞ
只有一身宜愛護 おのれの身ひとつ 大切にしてい
少教冰炭逼心神 なるべく心配 遠ざくるべし

とある。最晩年の達観の境地であろうか。
死ぬればどの前のことかわからないが、八四六年、居易は「醉吟先生墓誌銘、并序」（巻七一）を書いた。そこに「外は儒行をもつてその身を修め、中は釈教をもつてその心を治め、かたわら山水風月歌詩琴酒をもつてその志を樂ましむ」とある。これが居易自身による生涯の総評であろう。銘には「樂天樂天、天地の中に生まれ、七十有五年。その生くるや浮雲の然く、その死するや委蛻の然し。来たるは何の因ぞ、去るは何の縁ぞ。わが性は動かず、わが形はしばしば遷る。已みなん已みなん。われ安にか往きて可ならざる、また何ぞその間に厭恋するに足らんや」とある。けだし、空の空たる感懷を凝縮したものであろう。

むすび

小論は、白居易の詩文にみられる道家道教思想について述べたものである。言及した資料の間にどのような関連があるのか問題になるが、『白居易集』を一読して関

注

(1) たとえば、次のようなものがある。

市村瓊次郎「唐代の三教と白樂天の思想」、「支那学研究」第一編、一九二九年四月。
王拾遺「白居易研究」、上海文芸連合出版社、一九五四年八月。
金谷治「白樂天の精神」、「文化」第一九卷第一号、一九

五五年一月。
陳寅恪「元白詩箋証稿」、北京文学古籍刊行社、一九五五年九月。

小守郁子「白樂天の限界——その否定精神の欠如——」、「名古屋大学文学部十周年記念論集」、一九五九年三月。
塞長春「白居易思想散論」、「甘肅師大学報哲学社会科学版」一九八一年第四期、一九八一年十二月。

(2) 白居易がその生涯に執筆した詩文は、約三、八〇〇篇の龐大な分量にのぼる。したがって、資料の選択如何によって、正反對の居易像を描くことさえ可能である。そこで、居易の思想を検討する際には、とくに資料の選択に慎重を要する。

なお、居易が生きた時代は門閥世族に対抗して中小地主階級出身の進士官僚が登場してきた時代であり、思潮としては三教合一の傾向が強まった時代であった。居易は時代の影響を強くうけており、したがって居易の思想を検討することは、この時代の社会状況、時代思潮の検討という一面をも、やがては持つものである。

また、言うまでもなく、居易の真骨頂はその文学にある。居易研究の大多数が文学ならびにその周辺の研究であるのは当然である。本稿は、その方面について発言するものではない。

(3) 「与元九書」（巻四五）によれば雜律詩もあながち形式上の分類とばかりは言えないが、私見では閑適などとの区別は明瞭でない。

なお、底本は『白居易集』顧学頤校点、中華書局、一九七九年一〇月、に拠った。巻数は底本の巻数を示す。また、作品の執筆年代については、作品中に記してあるもののほかは、花房英樹『白氏文集の批判的研究』、朋友書店、一九六〇年三月、に拠った。

(4) 前注所引「与元九書」によれば、白居易の閑適は「孟子」尽心・上の「窮すれば則ち独りその身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を済う」にもとづくから、かならずしも老荘と結びつかないが、詠まれた詩には老荘思想に關係するものが多い。

(5) この賦は、居易の作品としては内容がやや晦渋である。押韻その他の、省試であるための制約と、典拠を踏まえる必要性と、試験官である高郢の氣風に合わせようとした点などにその原因がある。

(6) 居易の病氣については、今井清『白楽天の健康状態』、『東方学報』京都『三六、一九六四年一〇月、参照。

(7) 中医辞典編輯委員会篇『簡明中医辞典』、人民衛生出版社、一九七九年三月、『雲母』の項参照。同項は『神農本草経』などに拠った説明で、同出版社からは『神農本草経』の排印本が出版されている(一九六三年一月)。また、四部叢刊本『重修政和証類本草』も参照。

(8) 前注参照。

(9) 注1所引小守論文。また、同氏の、『陶淵明と白楽天——その人間性と文学性について——

—、『名古屋大学文学部研究論集』四五(哲学一五)、一九六七年三月、参照。

(10) 平野顯照「居士を表明する白居易の心情」、『神田喜一郎博士追悼中国学論集』、二玄社、一九八六年二月。なお、白居易の仏教信仰については、次のような論文がある。

撫尾正信「白居易の仏教信仰について」、『西日本史学』第五号、一九五〇年一〇月。

篠原寿雄「唐代禅思想と白居易」、『印度学仏教学研究』第七卷第二号、一九五九年三月。

平野顯照「白居易の文学と仏教——僧徒との交渉を中心として——」、『大谷大学研究年報』一六、一九六四年三月。

篠原寿雄「白居易の文学と仏教」、『内野博士還暦記念東洋学論集』、一九六四年十二月。

平野顯照「白居易文学と仏教経典」、『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』、一九七九年十二月。

(一九八八・四・一五稿)

(はちやくにお・東京大学教授)